

「スペインの 老後の暮らし」

昼食時には、ほとんどの住民が1階の食堂に集まり一緒にテーブルを囲む。この日のメニューはスペインの典型的な家庭料理「マドリド風コシード」で、会話も弾む

vol. **3** *Convivir*
高齢者集合住宅コンビビール

TEXTO/FOTOS = Yuji Shinoda



Residencia Convivir
Calle Juan de la Cierva,
6, 16410 Horcajo de
Santiago, Cuenca
Tel : +34 969 12 72 36
apartamentosconvivir.com





ホテルのような正面エントランスには、老人ホームのイメージはまったくない。裏には中庭や菜園が広がり、格好の散歩道がある



上)月1回開かれる住民集會では、運営スタッフによる行事の説明があり、住民からは様々な意見や要望が寄せられる
下)パソコンルームのほか、図書室、会議室、ゲーム室、リハビリルーム、診療室など、老後の生活に必要なと思われる全ての設備が整っている



フェルナンダさん(80)は、組合員として部屋を持っているが、日頃はバルセロナに住んでいる。骨折をしたので、療養のため介護設備が整っているコンビビルで3週間だけ暮らすことにした

マドリードから南東へおよそ100km、車で約1時間。ラ・マンチャ地方の北の端の小さな村、オルカホ・デ・サンティアゴの村はずれに高齢者住宅「コンビビル」はある。今までに紹介した施設同様、組合形式の施設だが、コンビビルは介護施設の認定を受けている。

スペインには、介護認定を受けた65歳以上の人が約91万人おり(2017年末時点)、介護が必要な人のおよそ1/4が、何のサービスも受けていない。リーマン・ショック後の緊縮財政で要介護の認定も厳しくなり、公的施設の数も人手も、日本同様にまったく足りていない。

コンビビルは、前回紹介したトラベンソルをモデルに、マドリードで働いていた友人同士が集まって2016年にオープンした。

2018年に取材した時の住人は、58～89歳の89人。住居は、ワンルーム、1LDK、2LDKの3タイプ。大半は1LDKで50㎡の広さがある。入居時に、約1,170万～1,800万円を組合に納め、毎月の生活費は、3食と光熱費、水道代などが全て込みで、1世帯あたり約12万円～28万円を払う。1人暮らしか2人暮らしかと、部屋の広さによって金額は異なる。すでに要介護の人も入居しており、介護士が昼間は1人、夜間は2人常駐して、24時間見守りを続けている。月～金曜日は、毎日5時間看護師がいて対応にあたっている。

入居者の元弁護士クルス・ロルダンさん(80)は、「女性も働く時代に、娘に世話を頼むことはできない。高齢者は共に支え合って、尊厳ある余生を送る場所が必要なんです」と語る。

日本も、自分たちの手で終のすみかとなるような共同住宅を作れるよう、広範な協同組合法を早急に整備することが必要である。



ワンルームの部屋に1人で暮らす元書店員のカルメンさん(68)は、一緒に生きるという考えが気に入ってここに住むことを決めた



篠田 有史 / Yuji Shinoda
1954年岐阜県生まれ。フォトジャーナリスト。24歳の時の1年間世界一周の旅で、アンダルシアの小さな町Lojaと出会い、以後、ほぼ毎年通う。その他、スペイン語圏を中心に、庶民の生活を撮り続けている。【写真展】富士フォトサロンにて『スペインの小さな町で』、『遠い微笑・ニカラグア』など。【本】『ドン・キホーテの世界をゆく』(論創社)『コロンブスの夢』(新潮社)、『雇用なしで生きる』(岩波書店)などの写真を担当。

コンビビルは、畑や自然に囲まれた、鳥のさえずりが聞こえる静かな丘に建てられている